

---

# 古の記憶

茅野 遼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

古の記憶

### 【Zコード】

N5871C

### 【作者名】

茅野 遼

### 【あらすじ】

ある日、仕事帰りにふらりと入り込んだ裏道で、主人公・坂下は一軒の古道具屋を見つける。何と無く立ち寄った店で、初対面の気難しそうな老人店主と、何故か茶を飲みながら、話をし始めてしまつた。

(前書き)

三年ほど前に、思いつきで書いた作品です。  
短編ですので電車の待ち時間にでも、肩の力を抜いて、お楽しみ下さい。

その日は、朝から何か妙な空氣の流れている日だった。

俺はいつも通りに、会社へ向かう途中、駅構内の喫煙所でタバコを吸っていた。

『何か今日は、人の流れがおかしいな…。どつかの線で、ダイヤが乱れたのかな。』そんな感想を抱いた。街へ出ると何となく何時もより人通りが疎らで、そんな朝の風景にも、奇妙な違和感を覚えた。

『何時もより2、3分遅れたのかな?』

そう思つて時計を見たが、そんな事もない。『変な』と思いつつも、その後はこれと言つて何事もなく、一日の仕事が終わった。

帰り道、早めに仕事が片付いた事だし、少し遠回りして行こうと言つ気紛れが起こったのは、もしかしたら、朝の奇妙な違和感が生じさせた出来事だったのかもしれない。

とにかく俺は、普段なら入つてみようとは思わない様な、細い道に向かつて足を進めていた。

気の向くままに裏道へ裏道へと進んで行くと、良く見知つている駅周辺の景色と、随分と違つて見える町並みが現れる。何となく下町感を残した雰囲気の中に、一件の古道具屋を見つけた。

その店は古道具屋、と言うよりは、むしろ骨董品の店といった方が正しいかも知れないような店構えで、その店番をしている主人は、それこそ骨董品の様な、口をへの字に結んで、鼻の頭にちょこんと老眼鏡を乗せた、いかにも気難しそうな老爺だった。

何故あの店の中に足を踏み込んだのかは、良く分からぬ。けれど気付くと俺は店の片隅で、それが使われていたのは、昭和初期か、大正時代かと言つような、古めかしいラジオに視線を引付けられていた。

「そいつは只の飾りだよ。何をしたって、ウンともスンともいわねえ。」

嗄れた声がして振り向くと、読んでいた新聞に田を落としたままの老爺が、ちらりと俺を見て呟いた。

「あんたも物好きな…」

「何で壊れたラジオなんて置いてあるんですか？」

と聞いたら、鼻で笑つた。

「飾りとしてさ、欲しがる客もいるんだよ。…さてと…」

新聞をたたんで立ち上ると、レジの奥の部屋に向かおうとする。暇だからな。奥で茶でも飲んでかねいか。」

言いつつ俺をちらりと振り向いた。俺は一瞬考えて、無言で頷く。氣難しそうに結んでいた口を僅かに緩めて、老爺は奥に引っ込んだ。俺も何となく付いていく。

「お邪魔します…。」

言いながら靴を脱いで、座敷に上がる。

「おう。何にも無いがな…。」

老爺は古めかしい魔法瓶形の、保温のみしか用を足さないポットから、ヤカンに湯を開けると、同じく古めかしい形の一口ガスコンロにかけた。ぼつ、と懐かしいような音を上げて火が着く。

「今、湯を暖め直すから、まあ適当に座つて待つとこてくれ。」

力チャカチャと音を立てて、茶葉を入れ替える。

四畳半の部屋の真ん中に、丸い折りたたみ式のちゃぶ台と、片隅には店に置いてあってもおかしくないような、古い茶棚と、ワンドアの小さな冷蔵庫、カラー ボックス2個分の文庫本や新書刊があるだけの、質素な部屋だ。

「ここで寝起きしてるって事じや、ないですよね。」

俺は素直に思つたまま聞いてみた。ヤカンがしゃうしゃう音を立てる。

「まさかなあ。近くにアパート借りてるんだ。」

茶棚の中から菓子を出しつつ、笑いを含んだ声で老爺がいう。

「…つすよね。」

それ以上言葉も見つからなくて、回りをキヨロキヨロ見回す。スツと灰皿がちゃぶ台の真ん中に置かれる。無言で老爺が頷いた。

「あ、どうも…。」

俺は上着のポケットからタバコを出すと、火を着け一吸いする。

『俺、何でこんな所にいるんだろ…?』

落ち着いて考えてみると、妙な話だ。何となく気紛れで入り込んだ古道具屋で、奥の部屋にまで上がり込んで、初対面の老爺とちゃぶ台を囲む…。いいのかなあ、こんなんで。

そんな事を考えていると、ヤカンがカンカン言い出した。老爺が立ち上がりつて、保温用ポットに湯を移す。そのポットから急須に湯が注がれて、間もなく緑茶が出てきた。この間、無言。

「いただきます。」

「まあ、そんなに畏まるこたがない。楽にすればいい。」

そつ言つて老爺は、自分の茶をひと啜りして、ちゃぶ台の上にあつたハイライトを銜えた。マッチを使って火を付ける。俺は正座していた足を崩した。

「兄ちゃん、この近くに勤めてるのか?」

煙を吐きつつ、老爺が尋ねる。俺は頷いた。

「あ、でもこの辺に入ってきたのは、初めてです。」

「そうだろうなあ。見たことねえ顔してるもんな。」

苦く笑つて、老爺が言った。

「何にもねえもんな。この辺りは、ちょっと駅の方へ行けば賑やかだがな。」

「そうつすね…。あ、すいません。」

初めて老爺が声を立てて笑つた。

「いい、いい。気にしなくても。本当になんにもねえからな。素直な人だよ。」

気難しそうに見えていた老爺が、この時、初めて身近に感じて、俺も思わず笑つてしまつた。何か一気に気が楽になつて、会話が始ま

つた。

「看板、古道具屋つてなつてましたけど、何か凄い時代物とか、ありそつすね、この店。正直言つて驚いてますよ。テレビ番組、思ひ出した。」

「ああ、開運なんとかつて奴だな。」

「見てるんですか？あの番組」

「一人で暮らしてるとテレビがらみしか無いからな。店は7時には

閉めるから、帰ると一度やつてるんだ。」

「へえ。やっぱ見ると、鑑定額とか判つちやうもんすか？」

老爺は少し考えるよくな間で、茶を啜る。

『なんだ、結構、話しやすい人なんだな。』

と俺は思つた。この爺さん、見た目で損してきたんだろ？ な。あつと。

「そつだなあ、判るのもあるな。」

老爺が答える。

「このつ古い道具たちと付き合つてるとな、気持ちが落ち着くん  
だ…。」

目を細めて、何か遠いものを見るよくな顔になつて、老爺は黙つてしまつた。

「あ、すまんすまん。つこ昔を思ひ出しちまつた。」

暫らくしてからやう言つて、こつ之間にか空になつた湯飲みに、新しく茶をいれて、菓子に手を伸ばした。煎餅のバリバリと言つ音がする。見掛けの年齢の割に、丈夫な歯の持ち主らしかつた。どう見ても70歳前後にしか見えていなかつたから、少し感心した。

煎餅を噛み碎く音に誘われて、俺も一つ手に取つた。パリッと音を立てて個包装の袋を開け、一口噛んでみて驚いた。…堅い。本当にこの老爺の歯は、丈夫だと嘗つ事が判つた。

バリバリと言つ、煎餅を噛み碎く音だけが響いていた。

「…あのラジオはなあ、ちょっとした訳有りなんだ。」

老爺が思い出したように言った。

「はあ、訳有り、すか？」

もともと古道具とか骨董品とか言つものに対し、興味を持つていなかつた俺は、そう言われたからと黙つて殊更、気持ちを引かれた訳でもなかつたが、この老爺のことは何となく、気に入つていてた。だからそのまま話を聞い「う」と思い始めた。老爺は時計を確認すると立ち上がつた。

「店を閉める時間だな。」

店の方に向かつて行きながら、言つた。

「兄ちゃん、悪かつたな。足留めして。お陰でいい暇潰しになつた。

「おいおい、これで終りかよつ！一氣になるじゃないかつ！と黙つて貯持ちが顔に出たのかもしれない。

「少し待つてくれ。店を閉めて来るか？」

そう言つて店先に降りていつた。

ガラガラガラッヒシャッターが締まる音がする。

「あら、もう閉める時間？内の亭主はまだ戻つてこないわよ。今日は残業もないつて言つてたのに。ビニード油売つてんのかしら、まつたく……！」

外から近所のオバちゃんと思われる、声がする。

「あんまり怒つてると、」亭主帰り辛くなるよ。」

それに答える老爺の声も聞こえてくる。この店、あそこ以外に出入り口があるんだ。と、俺は違うことに感心してた。

「はいはい、武藤さんは亭主の味方だったわね。」

「いやいや。」

と言つオバちゃんと、老爺の声と、笑い声がする。あの爺さん、武藤さんつて言つんだ。その時、初めて自分の名前も言つていなかつたことに気が付いた。

「じゃ、また明日。」

「はいはい。おやすみなさい。」

挨拶の声がして、暫く後に店の奥の方から、がりゅうといづ音がした。武藤さんと並んでらしい老爺が戻ってきた。

「武藤さんは、よついらせ、と書ひぶりに、四畳半に上がる。

「あ、武藤さんって書ひなんですね。すんません。俺、坂下って言います。」

取り敢えず、遅れ馳せながら自己紹介をしてみた。

「ああ、そういうやあまだ名前、聞いてなかつたな。悪かつたな。初対面の兄ちゃん足留めしちまつて、その上、自己紹介もしてなかつたもんなんあ。」

わつ、はつ、はつ！と、さつきよりまた大きな声を上げて笑う老爺と一緒にになつて、俺まで笑つてしまつ。名前が知れたんだから老爺つて表現し続けるのも何だな。

武藤さんは、初めの印象と比べて、俺の気持ちの中でビンビンハイ爺さんになつてきていた。

「それで、ラジオの話つて、聞いても良いことなんすか？」

一応、聞いてみないとならない。こういう古道具屋つて、良く知らないけど、他人の人生の裏側とか、立ち入つていそうな気がする。

「ん？ああ。まあ、もう無くなつたお屋敷の事だからな。返つてい

い供養になるんじやないかな…。」

座りながら言つた武藤さんは、さつきと同じ、遠いものを見るような目になる。無くなつたお屋敷つて…。俺は逆に何か不安になつた。何か呪いとか怪談とか、余り嬉しくない話だつたらやつぱりいやだよな。

「あのラジオはなあ、あるお屋敷の最後を見てきたラジオなんだ。」

えつ？お屋敷の最後だつて？ますます怪談に近そうな始まりだな。

「古い家だな。血縁が無くなつて、屋敷を取り壊すことになつた時に、何か掘り出し物が無いかと、見に行つて見付けて来た内一つなんだ。」

「へー。他には、何があつたんすか？」

「ああ、棚や、机や、宝石、食器何がが、俺の持つてきた分だがなあ。大体、売れちまつたな。あのラジオだけ売れ残つちまつたな。」

武藤さんは新しいハイライトに火を着け、茶をじばく。おつと失礼。啜つた。

「そのお屋敷は、昔は貴族の血でな。大正、昭和の初めには、随分と華やかだつた。まあ、実際に見たんじや無いが、あそこから持つてきた物を見ればな、こんな商売長くやつてるからなあ、良く分かる。」

言つて何度も頷く。

「あそこから持つてきた物は、宝石から食器まで結構、良い値が付いたんだ。それでも3ヶ月もすれば大体、引取り手がついてな。」

それから小一時間もかけて、時たま茶を啜りながら話してくれた話はこうだ。

その家は、たつた一人の嫡男を戦争に奪われ、後を繼ぐものも無く、取り潰されるに至つたとの事。今も売れ残つているラジオは、その兵隊に取られた嫡男の、愛用品だつたらしい。

息子が戦地に行つた後、残された両親が毎日、そのラジオで戦況報告を聞いていた訳だけど、あれつて確か、本当の敗戦宣言までは、耳障りの良い事しか放送されてなかつたんだよな。

息子の無事を信じて疑わなかつた父親が、敗戦宣言をされた数ヶ月後になつて、やつと知らされた訃報に嘆き悲しみ、そのうち沸いてきた苛立ちから、八当たりでぶち壊してしまつた、と言つ物らしい。

結局その後、修理される事も無く、息子の部屋の片隅で長い間埃を被つたまま、屋敷が取り壊されるまで、放置されていたラジオを、武藤さんが見つけた。

丁度その一週間前に亡くなつた、武藤さんの親父さんが、昔、愛用していたラジオがそれとそっくりだつたんで、何か因縁めいた物

を感じて、引き取ってきた、って言つのが、あのラジオだったって事だ。

俺が最初に想像していたような怪談話とは程遠かったが、まあ、あんまり良い話で無いのは確かだよな。

その屋敷つて言つのは、ここから車で一時間程離れた場所にあつたらしい。今はもう、かつて貴族の屋敷が存在した面影も無く、大きな幹線道路に姿を変えていると言つことだ。

話が終わり時計を見ると、九時をとつぐに回っていた。

「長居しちゃつてすみません。俺、そろそろ帰ります。」

立ち上がり、出入り口に向かうと、

「悪かつたな。年寄りの長話に付き合わせちまつて。

武藤さんは『よつこいらしょ』と、腰を上げる。

「すまないが、表は閉めちまつたから、裏から出でくれ。」

と、向かって右側を指差した。俺は靴を履きながら、身を斜めにして、出入り口を確認する。『ごちやごちや』と売り物なのか、そうでないのか分からぬい物が積まれている脇に、古い片開き式のドアを見つけてた。

「分かりました。」

言つて立ち上がろうとした時、腹が鳴った。かなりでかい音だ。

「そうか、腹も鳴るなあ。この時間じゃ。そうだ、そうだ。」

笑いながら言い、武藤さんも帰り支度を始めた。

「兄ちゃん、一人暮しか?」

「そうつすよ。」

振り向いて答える。

「そうか。なら、付き合つついでに、ラーメンでも食つてくか。近くに美味しいキョウウザを出す店があるんだ。」

家に帰つても、どうせカツラーメンだと思つた俺は、直ぐに言つた。

「いいつすね、寄つてきましょ。」

「そりが、じゃあ行くとするか。」

武藤さんは嬉しそうな顔をして、いそいそと靴を履いた。

この辺りまでくると、私鉄線は一番目の駅の方が近いと言つ事で、そちらへ進路を取り、五分も歩かない内に、お勧めのラーメン屋に着いた。武藤さんのアパートは、もう目と鼻の先らしく、お馴染みの店らしい。

カウンター席が10席のみの、ごく小さな店だ。今日は直ぐに座れて運が良かつたと言いながら、一番奥の二席に腰掛ける。

武藤さんは、最近はめつきり弱くなつて、と言つてビールをグラスに一杯だけ、餃子を一皿つまみにして、ゆっくりと飲んだ。俺は大瓶の残りを全て一人で飲み、大盛りラーメンと、話通りになかなか美味しい餃子に舌鼓を打つ。店を出る頃には歳の離れた友人が一人増え、ついでに新しいバイト先を一つ得た。

と言つても、武藤さんの古道具屋でのバイトは、どちらかと言つとボランティアに近い。バイト料というよりも、月末の金詰りの時に、美味しいラーメンと餃子のタダ飯を用意して、見掛けよりもずっと気の良い老人の話し相手兼、軽い店番をすると言つ感じだ。

何はともあれ、ほんの気まぐれから寄り道をして知り合つた老人と、こうして長い付き合いになつた。あの朝の奇妙な感じは、全く無意味だった訳では無かつたと言う事だ。

一期一會、つて云つ言葉もあるしね。今では本当に良い付き合いをさせてもらつていてる。

あの古道具屋で扱つてる物つて、最近、流行りのリサイクルショップで扱つてる物とは、何か違つ。本当に価値有る骨董品か、それとも単なる「ミミ」なのか、正直判断に苦しむ物も多いんだ。

でも武藤さんは言うんだ。

「古道具つてのはな、かつての『主人様の気持ちを、受け継いでる物なんだ。大事にされた物、そうでなかつた物、いろいろだがなあ

…。確かにそこにあつた事を、その家の慶び」とも、悲しい事件も、何もかもみんな見てきてるんだ。例えばな、手垢の付き方や、塗料の剥げ方、小さな傷や染みなんかの一つ一つに、いろんな事が記憶されると、俺は思うんだよ。」

だから、俺なんかには「ミミに見えるような物でも、店に置いておくのだそうだ。それで話の最後に、いつも必ず笑うんだ。

「まあ俺が、もつたいたくない物を捨てられない、タダの古い人間なだけかもしかんがなあ。」

つて。俺はそんな武藤さんとあの店を、結構気に入っている。

### 《終わり》

(後書き)

お仕事合意、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5871c/>

---

古の記憶

2010年10月20日18時59分発行